

経済学と自然科学

一 はじめに

「経済学の研究には、なんらかの人並みはずれて高次の専門的資質が必要とされるようにはみえない。それは知的見地からいって、哲学や純粋科学などもっと高級な部門に比較すると、はなはだ平易な学科ではあるまいか。それなのにすぐれた経済学者、いな有能な経済学者ですらも、類いまれな存在である。平易で、しかもこれにぬきんでたひとのきわめて乏しい学科！ こういうパラドックスの説明はおそらく、経済学の大家はもろもろの資質のまれなる組合わせを所持していなければならぬ、ということのうちに見いだされるであろう。……彼はあの程度まで数学者で、歴史家で、政治家で、哲学者でも

なければならぬ。」(ケインズ、熊谷・大野訳『人物評伝』一三六頁)

右に引用した一文は、ケインズが経済学者マーシャルを評したものとよく知られているが、同時にそれは、経済学がどのような性質をそなえた学問であるかを適切に指示したものと意義深いものがある。今日では、経済学は社会科学のなかで、最も科学の名にふさわしい独立した一学問体系であるかのように思われている。しかし、冒頭に引用したケインズの経済学観、経済学者観が示すように、経済学ほど多面的であり、したがってまた隣接諸科学との関連が深い学問もないであろう。ポールディングはその著『科学としての経済学』において、経済学を社会科学・生態科学・行動科学・政治科学・数

美濃 口 武雄

理科学・道徳科学に分解し、経済学のもつ多面性を指摘するとともに、現代および将来の経済問題に経済学がこたえてゆくためには、いかに学際的、総合的研究が必要かを説いている。

経済学という学問は、極端な言い方をすると、すべて経済学以外の諸科学に因数分解され、経済学はいっしょに経済学ではなくなってしまうようにさえ思われる。とくに経済学は社会科学でありながら、生物学、数学、物理学、天文学などの自然科学的諸要素を多分にふくんでいる。私はすでに昨年刊行した『経済学史』において、「経済学が隣接諸科学の発達に強く影響され、発達してきた」という事実を指摘し、その結果、「経済学というものが独立の学問であるかのように今日みなされているけれども、学際なくして経済学の進歩も発達もあり得ない」と主張した。しかし今になってみると、この主張の論拠がはなはだ薄弱であったように思われてならない。本稿は、この不十分さをいささかでも補おうとする試みにほかならないのである。

二 自然科学の経済学への影響

——過去からの例証——

学説史上、経済学の創設者を重農主義学派のフランソワ・ケネーにもとめるのが慣わしであるが、それは彼が「経済表」によって、経済生活をつらぬく自然的秩序を解明し、経済学を厳密科学たらしめたからに外ならない。さらに、「経済表」は、のちにマルクスの「再生産表式」やレオンチェフの「産業連関表」などのいわば「原表」になっているという事実からしても、経済分析の歴史に占めるその意義はきわめて大きい。アダム・スミスの『国富論』の第二篇第九章には、ミラボー伯が「経済表」に与えた次のような讃辞が引用されている。「世界が始まって以来、政治社会に主として安定性を与えた三大発明があった。……その第一は、文字の発明である。……その第二は諸文明社会間のいっさいの関係を連結する貨幣の発明である。その第三は、右二発明の結果たる経済表の発明である。これは右両発明を補ってその目的を完成させるものである。これはわれわれの時代の大発見であるが、その利益はわれらの子孫が収穫するのである。

う。」(竹内訳『国富論』中巻、五七九—八〇頁)

ハイマンは彼の『経済学説史』において、重農主義経済学説を「生物学としての経済学」と規定しているが、それは次のような理由によると思われる。すなわち、「フィジオクラットの野心は、経済社会における生活も、個々の有機体でのように、有機的な自己継続的な性質をもつものであることを証明することであった。身体内の血液は、いろいろな器官を経てある成分をすて、他の成分をえて、厳格に定まってみちを辿り、最後にどの点をとって見ても、さきそこに着いたときに全く同じ構成で、再びその点に到達する。正しくそれと同じに、社会の富も、生産、交換および分配を経て、厳格に法則にかなった調和的な仕方でも再生産される。こうして経済学は、経済社会の生理学としてあらわれるのである。」(喜多村訳九〇—一頁)このように、ケネーが経済社会を生物有機体のごとくとらえ、有機体としての社会の運動法則を明らかにしえたのは、彼がそもそも医学を修め、官廷においてルイ一五世やマダム・ボンパドウールの待医をつとめるほどの人物であったからであらう。すなわち、医学・生物学の発達をもたらした所産が「経済表」であ

った。とくに、当時、ウィリアム・ハーヴェーの発見した血液循環図が表の作成に大きな刺激を与えたことは否定できない。フランスの学史家、ジイド・リストによれば、「すでに動物経済に関する一書を発表し、かつハーヴェーの新しい発見を熟知していたケネーの如き学者は、この生物学上の思想を社会学の領域に應用すべく正しく適當の人といふべきであった。彼はこの思想を、彼の経済表においてあらわしている。」(官川訳『経済学説史』上巻、二七頁)と示唆しているが、ハーヴェーとケネーとの関係については、坂田太郎氏の『経済表』の解説に明快に次のように書かれている。「経済表はハーヴェーの血液循環の理説に擬して流通の秩序を考え、この秩序に沿う生産の進行を一生産期間の構想にまとめ上げ図式化するところに他ならなかったことは言うまでもない。」(同書四五頁)そしてハーヴェーの血液循環とケネーの流通の秩序との対応関係については次のように解説している。「ハーヴェーの理説の功績は、血液が絶えず肝臓でつくられ、心臓で成熟し、それから身体の各部に赴いて絶えず消費されつつあるというガレーンの旧説をあらため、心臓の機能を能動的にとらえ、その力づよい

伸縮によって血液が動脈管におし出され、それが身体各部に行き亘った後、静脈管によって再び心臓に還流し、循環止むことなきものであることを明らかにした点にあると言われる。しかもこの事実の確定は定量的計算にもとづいているという。ケネーの原表において心臓部の地位をあてがわれているのは、形の上では地主階級である。

(もちろん人造血機能を担当するのは生産階級に属する農業者であろう。) 血液たる貨幣はそこから押し出され、農業者、商工業者の間を循環するが、この循環がとりも直さず資本の転形を可能にし、その再生産を媒介するのである。(前掲書、四五―六頁)

経済学がその成立の当初において、「生物学としての経済学」であったことは、以上の学史家の論証によって明らかであろう。だが、経済学と生物学との交流は、ケネーとハーヴェーにかぎられるものではない。学説史上有名な事例としては、なお、マルサスの人口論とダーウィンの進化論、スペンサーの社会進化論とマーシャルの有機的成長の理論との交流がある。

ダーウィンの進化論の根底にある自然淘汰の考え方が、マルサスの「人口論」にヒントを得たものだということ

は、科学史においては常識になっているようである。たとえば、木村陽二郎篇『科学史』によれば、「ダーウィンはここで、変異の原因はそれほど追求せず、個体変異に注目し、それが人間の好みにより選ばれて次第に変異が一方に累積されるとみた。それでは自然界において変異のうちどのれを誰が選ぶかが問題となる。彼がこの問題になやんでいたとき、かつて読んだマルサスの『人口論』を思い浮かべた。マルサスによれば、食料の生産は算術級数的にしか増えず、人口は幾何級数的に増えるので、当然食料問題が起こる。ところが生物の増殖はもっといちじるしく、そこでは生存競争は数段とはげしい。自然界の生物も各個体の変異はあるが、環境に有利に変異していったものが生き残る。いわゆる適者生存である。このように多数のものから選ばれたものは、何度も選ばれて長年の間には次第に変異の度を強め、ついには新しい種が誕生する。これを自然選択(自然淘汰)という。彼の進化説は自然選択説である。」(同書、一六〇頁)

小泉丹氏が「マルサスとダーウィン及び社会ダーヴィニズム」と題する論文で立証しているように、マルサスの『人口論』がダーヴィンに与えた影響は、ダーウィンの

自叙伝に書かれている。「一八三八年十月、すなわち組織立った探究をはじめから一五カ月たった折、たまたま慰みにマルサスの『人口論』を読んだが、動植物の習性に関して、永い間続けてきた観察の結果として、所在におこなわれている生存のための抗争を認める素地ができていたので、たちまち、かくの如き事情のもとにおいては、好都合なる変異は保存され、不都合なるものは滅ぼされる傾向があることが想いふかんだ。」(小樽高商編『マルサス研究』所収、三六七頁) また『種の起源』の緒言にも次のように記されている。「……その次の章では世界中のあらゆる生物の間に、それらが高い幾何級数率をもって増殖する結果として、避くべからざるものである「生存抗争」について考究する。此は動物界全体にあてはめられたマルサス説である。」(前掲書、三六九頁)

だが、以上のようなダーウィン自身の告白にもかかわらず、今日では、マルサスの『人口論』がダーウィンの進化論を生み出したという見方は支持されていないようである。たとえば八杉竜一氏は『進化論の歴史』で次のようにのべている。『『人口論』の初版は一七九八年で、

一八二六年に第六版がでてゐる。周知のように、マルサスは、人口は幾何級数的にふえるが、食物とする家畜や作物は算術級数的にしかふえないということから、社会でのその欠乏を、貧困や諸悪の根源であるとしている。ところでこの書物の初版と第六版とをよんでみても、直接的に個体間の生存競争についてのべている箇所はない。

ではダーヴィンは、はたして『人口論』からなにかをはじめて汲みとることができたのか。……過剰繁殖によって生存闘争あるいは競争が必然的におこるといふ觀念がまえからもたれていたとしても、『人口論』をよむことによってそれが明確化されたといふことはあつたであろう。また『人口論』ではヒッジなどの品種改良のことが例にでてきて、それは改良に限度があるという例なのであるけれども、生物の変化という点でなにかをダーヴィンに示唆しえたかも知れない。だが『人口論』によつてはじめてダーヴィンの学説がうまれたのではないように思われる。」(同書、一二一—一二頁)

シュンペーターも、マルサスがダーヴィンに与えた影響については、ひかえめに評価すべきだと考えているようである。「ダーヴィンがマルサスの人口理論からイン

スピレーションを受けたという彼の言葉に対して註釈を加えておきたい。自分自身の精神過程についての当の本人の言明に背くのは、確かにあぶないことのように思われる。けれども全く一寸した事件や暗示でも良く一定の思想の流れの真相を暴露することがあるものだ。ダーヴィン自身はその『種の起源』の序曲のなかではマルサスの著作を引用しているが、〈重視されるべき〉その歴史のスケッチのなかではこれを挙げていないのである。そして「それぞれの種の個体は生き残りうる以上に多くのもので生まれる」というような言明は、それ自身としては陳腐言以上のものではない（そのみならず、これはいかがわしいマルサス説でもある）。かくして私は、ダーヴィン説の展開に対してわが経済学が致したサーヴィスは、かの有名な驚鳥がローマに対して果たしたそれに、いささか類するものがあるのを恐れる。」（東畑訳『経済分析の歴史』第三卷、九四〇頁）

かくして、生物学と経済学との交流において、前者が後者に影響をおよぼすことはあっても、後者が前者に刺激を与えたなどということは短絡には主張しえない。しかしマルサスの『人口論』が、すくなくとも、生物学者

にも興味を覚えさせ、示唆を与えずにはおかぬほど生物学的要素をふくんでいたことは否定できないであろう。もっとも進化論については、経済学が生物学に与えた影響よりは、反対に、生物学が経済学に与えた感化を説く方が当を得ているかも知れない。そしてそれは、ダーヴィンの生物進化論を社会進化論に適用したスペンサーのマーシャルへの影響にみる事ができる。

マーシャルの経済学が古典派の経済学の伝統を豊かに受け継ぎながら、それとは異なるところは、古典派の自然的な社会観を捨てて、新たに有機的成長の社会観を導入したところにある。すなわち、古典派の経済学では、スミスにしてもケネーにしても、「経済社会の秩序の根底には自然的秩序があり、これが経済現象を規制しているといった思想が流れていた。経済法則はこの自然秩序の現れ方をとらえようとするものであるから、それは自然法則の性格をもっている。」ところが、「こういう思想は、一九世紀なかば、進化論の台頭にもなって動揺をきたすことになって、これに代わって社会進化の思想が力を得てきた。経済社会の根底にも有機的成長の秩序がひそんでいると考えるようになった。こういう社会観の

変転に対応して、経済理論の組替えを企てたのが、マーシャルであった。」(馬場啓之助訳、マーシャル『経済学原理』I、二四五―六頁)

では、ここにいう社会進化の思想ないしスペンサーの社会進化論とはどういう内容のものであったのだろうか。ところで、マーシャルは、一八八五年、『経済学の現状』と題する教授就任公開講義において次のようにのべた。

「かくして、現代、経済学上の観点について行なわれた変換は、帰納法をもって演繹法を補充しかつ指導することの重要なを発見したことにもとづくものではない。蓋しかかることは以前からよく知られていたからである。それは、人間自身が大なる程度において環境の産物であり、環境と共に変化するものであるということの発見にもとづくものである。」そして、リカードに代表される古典派経済学の欠陥について、「彼等は人間をいわば不変量とみなし、その変化の研究に努力するところがなかった。」(杉本栄一編『マーシャル経済学選集』、一八〇―一頁)とのべている。ここで、「人間が環境と共に変化する」という考えこそ、実はスペンサーの社会進化の理論が提起している根本理念なのであった。馬場氏は

スペンサーの『社会静学』における社会進化論を次のように要約している。「社会状態にある個人にとっては、社会的な条件に適應していることが、その生存を確保するために不可欠なことがらである。適應できるものだけが栄え、適應できないものは亡んでいくほかはない。このような適應の過程が累積されていく結果、個人の性格も徐々にではあるが、とにかく変化してゆく。ちょうど使用しない器官が退化していくように、環境へのながい適應過程は個人の性格を変化させていくのである。この変化の過程は個人の生涯一代かぎりで終るものではない。この過程はつぎの世代へと継承されていく。『社会静学』においては、主として社会条件にたいする個人の適應関係が分析されているが、人間の性格が変化するならば、これに対応して社会そのものもまた変化していくはずである。個人は社会に適應するが、社会もまた個人に適應する。この相互適應の結果、社会と個人はともに変化していく。」(同書、一五五頁)

こうした社会進化の理念を経済学の純粹理論にとり入れるためには、なおのりこえてゆかねばならない障碍があらう。それがどのように克服されたかは、『原理』の

内容に立入った説明が必要であるが、本稿ではその紙幅はない。ただ最後に、マーシャルがなぜこのように経済学において生物学との類同性を重視するに到ったのか、その理由を明らかにしておこう。「産業的ならびに社会的の『進歩』または『進化』は単なる増減ではない。それは有機的成長であり、相互に影響し合う数へ切れぬ要素の衰微によって精練され、また時には修正をされるものである。さうしてかかる相互影響は各要素が既に達したる成長の段階に応じて異なるものである。この活動的な面においてはすべての生物科学は互いに近接し、物理科学とは趣きを異にする。故に経済学の後段階において、我々が生命の状態に近づくにつれて、他の事情にして等しきかぎり、生物学的類同性が力学的類同性よりも選ばれることになる。」(杉本編『マーシャル経済学選集』所収、「経済学における力学的類同性と生物学的類同性」二五八頁)

右にみてきたように、経済学は過去の歴史において、生物学の思想や理論に影響されるところがきわめて大きかった。しかし自然科学のなかにあって、経済学が受けた恩恵は生物学にとどまるものではない。次に対象とす

るのは、経済学と数学・物理学・天文学などとの交流である。

ボナーもいうように、「数学はしばしば天文学・物理学、その他の自然科学の分野とつながり合い、互に影響を持ち合って現われてくるが、今日ではいわゆる人文諸科学とも根深い親近性を持っている。」(村田訳『科学史における数学』一九三)ただ、人文諸科学のなかで、経済学がとくに恩恵をこうむっているのは、一七世紀、一八世紀をつうじて発見され、また確立されていった数学や物理学であって、それは具体的には、ニュートン、ライプニッツ、ベルヌイなどによる微積分学や関数論、ラグランジュの解析力学などであった。そして経済学者といわれる人々のほとんどが、こうした数学や物理学の影響を直接、間接にうけているのである。

ハイマンはスミスの体系を「物理学としての経済学」と名づけ、またポルディングは、スミスの体系は思考の構造において本質的に数学的なものだとのべている。たしかにスミスの経済学は、自然価格という一種の均衡価格をめぐる経済諸量の変化する力学的体系であるが、こうした物理学の着想をどこから得たのであろうか。ス

ミスの哲学的諸論文のなかに「天文学の歴史に例証された、学問研究を指導し指揮する原理」というのがある。これはスミスの学問的方法を知る上において欠かせない重要な文献であることが、シュンペーターによって指摘されているものであるが、このなかで、スミスは科学ないしフィロソフィーについて次のようにのべている。「フィロソフィーは自然の諸原則を結びつける学問である。自然は普通の観察によってえられる最大限の経験を通じて、前後にきりはなされ、脈絡のないようにみえる——それゆえ容易に想像力を働かしえないような——諸々のできごとにみちみちているようである。それらの諸々のできごととは、いわば不規則出発と突進によって、それについてつきつきと想いめぐらされるので、……混乱と散逸をひき起す傾向があるのである。すべてのこれらのばらばらのものを結びつける、眼にみえない連鎖を提示することによって、フィロソフィーは、このような不調和な外観をおびた混乱のなかに秩序を導入して、錯雑した想像力を鎮静させようと努力する。フィロソフィーが宇宙の大変化をみとおすときには、想像力は、それ自体きわめて快適であり、その場にもっともふさわしい

静けさと落着きの調子を回復するのである。」(岡田純一著『スミス』三九—四〇頁)

このスミスの科学観を岡田氏は次のように解説する。「自然はばらばらで脈絡のない諸々のできごとに満ちているかに思われるが、フィロソフィーの目的は、『自然の統合原理』を見出すことにあり、その目的を達成することによって、想像力はその本来の静けさと安らぎを回復する。つまりフィロソフィーの目的は諸現象の相互依存性を認識することと相まって、自然の一貫性を説明し、一つの複合体をなしている現象、外観を説明する一つの体系をつくり上げて行くことにある。このようにスミスは説いているのである。」(前掲書、四〇頁)

では、自然の結合原理とはなんであろうか。スミスは天文学史において、古代の天文学者らの体系、すなわちアリストテレスの体系やブトレマイオスの体系、そして近世のコペルニクス、ケプラー、ガリレオ、デカルトの体系やニュートンの体系などを比較研究していつて、ニュートンにおける一つの結合原理としての重力を高く評価している。そして、スミスは学問的方法として、ニュートンの体系構成に刺激をうけ、「一見ばらばら複雑な

現象を一定の原理によって結合するというニュートンのヴィジョンを社会的諸現象を説明するうえに適用し、真の体系——十分に確立された経験的事実を原理とする体系——を作ろうと願望した。」(前掲書、四四頁)であった。このように、スミスの体系は方法論のうえで、ニュートン力学の影響をうけているのであるが、その受け方はかならずしも直接的なものとはいえないであろう。経済学がたんに方法論のみならず、内容においても本質的に力学的体系と化していくのは、いわゆる限界革命後の経済学においてである。

クインの『科学革命の構造』以来、経済学においても科学史の研究がさかんであるが、ワルラス研究家のジャッフェによれば、ワルラスの一般均衡体系は、まさに物理学における静力学の体系そのものであった。「一般均衡にかんするワルラスの連立方程式モデルの真の源泉は、ルイ・ポアンソのかつての名著であった純粋力学の教科書『静力学要論』(一八〇三年)にほかならない。この書物は、ワルラスが一九〇一年にある友人に打ち明けたように、彼が一九歳のときはじめて読み、そのち彼の一生をつうじて座右の書として愛蔵しつづけた書物であ

る。われわれはポアンソのなかに、ワルラスがのちに『純粹経済学要論』で用いた形式的分析装置のほぼすべてを見出すことができる。ポアンソの『静力学要論』は連立方程式の体系に充滿しており、それらのあるものはまさしく均衡方程式そのもので、他は条件式(制約式もしくは定義式)である。そしてもし体系が未知数の数と同数の独立な方程式から成り立っているならば、確定的な解が存在すると仮定されているところも同じである。」(安井・福岡編訳、ジャッフェ『ワルラス経済学の誕生』一四頁)

もっともポワンソのみがワルラス体系を生み出したわけではない。彼以前ないし同時代の経済学者からの影響も逃せない。とくにイスナールの『財富汎論』からは定式化において、またクルノーからは需要関数をつうじて関数関係を学んでいる。そして体系化において直接的に最も貢献したのは、ワルラスの同僚であったポール・ビッカールであったといわれている。『要論』の胎児は、形態学的には一八七〇年にでき上がったが、生理学的にはまだまだ不完全であった。欠如していたのは、いわば自動的に体系に活動を与え生命を授ける内蔵であ

った。一八二七年のままで、そのような器官が存在する徴候はどこにも見られず、そのときになってはじめてワルラスの同僚であるポール・ピッカールがワルラスに手をかして、彼がクールノーから受け継いだ経験的需要曲線から脱却する厄介な仕事を解決することになったのである。需要曲線を効用関数から合理的に導き出す問題に、微分学の極大化の手法をどう用いるべきかをピッカールがワルラスに示すやいなや、すべてが適当な場所に落ちつくことになり、ワルラスの体系は始めて生命を吹きこまれることになった。」(前掲書、三一頁)

このほかワルラスは、効用の可測性にかんじて、当時の著名な数学者であり物理学者であった、ジュール・アンリ・ボンカレールと往復書簡を交わしたり、同じく数学者のヘルマン・アムシュタインからはラグランジュの未定乗数法による解法などの手ほどきをうけている。このように、自然科学の恩恵という点では、ワルラスほど大きかった経済学者も少ないであろう。

ワルラスのあとをついでローザンヌ大学の教授席についたパレートもこの点では同じであった。彼もまたイタリアのトリノの理工科大学でラグランジュの解析力学を

学んだが、これが彼のいう『社会システム』の社会概念のバラダイムになっているという(松島敦茂「V・パレートにおける経済学と社会学」三〇七頁)。そしてまた、パレートほど経済学を純粋な力学の体系にきたえ上げることに専心した学者もいなかったのである。

パレートは、ワルラスのいわゆる「発見的仮説」とみた基数的効用ないし主観価値をしりぞけ、序数的効用ないし選択指標関数を取り入れたことで有名であるが、それは彼の立場からして当然のことであった。パレート研究家のヴィンセント・タラッシュヨによれば、パレートにとって限界革命後の新しい経済学は、限界効用学説という価値論にその意義があるのではなく、むしろ価値はパレートにとって、不要なものだったのである。「新しい経済理論は、価値を説明せんがために生まれたものだと考えている人がいるが、とんでもないことである。私は価値の形而上学的な起源とはちがった別のものを求めているのだ。」(岡田・早坂訳『経済学と限界革命』一一七頁)では別のものとは何であったのか。「私は経済事象と関連し、かつこれを説明できる理論を探し求めているのである。私自身はこうした目的を実現できるものとし

で、純粹経済学上の方程式体系を知っているにすぎない。ちょうどそれは宇宙機構の方程式体系が、天体の運動を説明し、またそれをあらわしているのと同じようなものである。私が純粹経済学の理論を受け容れるとしたら、これ以外の理由はない。」(前掲書、一一七頁)

パレートは経済学を力学の体系とみなし、経済学から価値をはじめとする人間的・主観的側面をことごとく排除して、客観的要因すなわち、経済諸量間の関係を研究とする科学として経済学をきたえ上げていった。ジョルギュスク・レーゲンは、パレートの経済学を「人間のない科学」だと評しているほどである。それゆえにこそ、パレートは経済学の世界から追放した要因をとりこむことのできる別の体系、すなわち社会学の体系の建設に努めるのである。

三 今日における学際の必要性

前節において、私は経済学がいかに自然科学の影響をうけつつ育ってきたかを、いくつかの例をあげて立証してきた。しかも経済学における科学性というのは、このような自然科学における論理実証主義の精神を受け容れ、

その体系構成の方法をとり入れることによってつちかわれてきたのである。もちろん経済学は自然科学ではなく社会科学である。社会科学としての経済学には自然科学の手法をもってしては分析することのできない側面が多分にある。馬場氏は『社会科学としての経済学』において、経済学にはその固有の問題領域のほかに限界領域のあることを指摘しているし、都留氏も『現代経済学』において経済学には素材面と体制面のあることをつねに強調している。すなわち、経済学はその多面性のゆえに複雑かつ高度な学問なのであろう。

今日、近代経済学を批判する人々の多くは近代経済学の物理学的・力学的性格のもつ欠点を指摘する。しかし考えてみると、現在の近代経済学がとり入れた自然科学は、もはや過去の遺産と化した一七・八世紀のそれにはすぎない。かつて本学で経済学史を担当した故杉本栄一教授が、近代経済学の科学性の限界をのりこえるために、若き日の都留、高島氏らとともに、『自然科学と社会科学の現代的交流』をはかるべく、物理学者の武谷三男、久保亮五氏と真剣な討論を交わしたことを思い出す。そこでこのねらいは、マルクス経済学こそ近代経済学として

の眞の科学性をそなえたものであることを、量子力学とくに湯川博士の中間子の理論との対比において立証しようとするにあらざらぬと思われる。この交流の試みはかならずしも成功したようには思えないが、こうした努力を重ねることが、近代経済学批判を展開する一方において必要なのではないだろうか。

ケインズ経済学の再評価で脚光をあびているレイヨ
ン・フーヴッドは、微生物学者、アンドレ・ルウォフの
次の言葉を、再評価の基礎にすえているようである。

「有機体というのは、構造やら機能やらの統合された単位である。すべての分子が調和的に運動しなければならぬ。各分子はその他の分子がなすつあることを知っていないなければならない。各分子は情報をうけとることができるなければならないし、命令にしたがうことのできるよう充分に訓練されていなければならない。有機体はこの分子相互間のコミュニケーションの問題をいかに解決するであらうか。」(Axel Leijon hufvud, Keynes and

The Classics, p. 24) 有機体を経済に、分子を取引主体におきかえてこの文章を理解することにより、レオンはケインズ再評価の鍵を見出し出しているように思われる。新古典派経済学を『ソシオ・エコノミックス』で批判した西部氏も、新古典派経済学の根底にある「経済人」の仮説に疑問を提示し、経済行為を集団的人間の行動としてとらえようとしているが、これもまた組織を重視する点で、社会有機体説に立っていると見えよう。

社会科学としての経済学の側面を強調することは、自然科学との訣別を意味するものではない。むしろ現代の生物学なり物理学がどのような思想をもっているかを知らなければならぬ。過去における自然科学と経済学との交流の歴史は、その必要性を教えてくれているように思われるのである。

(一橋大学教授)